

〔論 説〕

ジョン・万次郎と外交官としての歴史的役割

——日米関係の最初の枢軸——

伊 藤 重 行

はじめに

日米関係、すなわち日本と米国の関係の始まりは、教科書的に言えば、ペリー提督が四艘の黒船でやってきた1853年6月3日になっている。今からわずか150年程前である。日本史の長い流れから見れば、150年とは本当に短い。このペリー提督の黒船の到来は江戸幕府にとっては歓迎どころか迷惑なことであった。しかしこの事実は国家間の接触という日米外交の始まりであり、また国家間の表舞台の話でもある。日米の国家間の公式の接触と外交よりも、もっと先駆的なジョン・万次郎（1827-1898）の第一歩があったのだ。それは非公式であったが、それまで外交関係が無かったから当然のことであった。しかも彼の第一歩は、日米関係を考える場合、見逃すことが出来ない歴史的事実である。国家間の接触と外交を表舞台とすれば、ジョン・万次郎の日米関係は裏舞台となる。とかく裏舞台は先駆的であることが多い。ジョン・万次郎の場合もまさしく先駆的であった。長い国家間の外交関係の歴史をみれば、人間の接触を含む外交は、個人的関係から国家的関係と進展していることが分かる。この意味で日米関係の始まりとしてジョン・万次郎の役割、すなわち彼の外交官的役割を見逃してはならないと言えよう。日本人としてわれわれは、裏舞台の話から日米関係を見る必要があると強調しておきたい。ジョン・万次郎は、これまでの定義では、太平洋の漂流冒険者、最初の米国留学生、黒船来航時の通訳、英米学開祖の一人となされているが、民間外交官であったとその定義に加えておこう⁽¹⁾。史実的に見ると、黒船来航時の通訳をしたは間違いである。その時はむしろ幕府に警戒されていて出番がなかったのである⁽²⁾。むしろ1954年の日米和親条約（神奈川条約とも言う）締結、1858年の日米修好通商条約締結等の後に、1860年の日米修好通商条約の条約批准交換の時から通訳になっているのが正しい。明らかに1860年の威臨丸での米国公式訪問には通弁士、すなわち通訳になっていたからである⁽³⁾。ジョン・万次郎研究を通じて日米関係は、米国主導であるという点で180年前のジョン・万次郎の時代と1945年以降の戦後の時代と構造的違

いが無いと結論できる。

1、日本最初の留学生であり、日本最初に地球は丸いを体験したジョン・万次郎

ジョン・万次郎は、日本最初の記録された留学生であった、しかもホームステイ経験者であった。さらに日本のコロンブスとも言える、地球は丸いの最初の体験者であった。彼は、いくつかの名前を持っている。中の浜の万次郎、John Mung(ジョン・マン)、John Mungero, John Manjiro, 中浜万次郎信志(「のぶゆき」と読み、土佐藩の侍になった証拠)、中万(殺害しようとしている者をくらす隠語)、土佐万様(あまりにも航海術に長けていたので咸臨丸の船員が敬意を表して使用)である。また文字が普及していなかった時代なので満次郎、萬次郎、万次郎等がある⁽⁴⁾。近年はジョン・万次郎と中浜万次郎が定着して来ている。

(生誕地) ジョン・万次郎は、1827年に四国の足摺岬、現在の高知県土佐清水市の「中浜」と言う漁村に漁師の子として生まれた。今から約180年前であった。その当時はまだ姓がなく、単に万次郎であった。父悦助は万次郎が九歳の時に病死、兄時蔵は病弱、母しほが家計をやりくりしていた。このような家庭環境であったから万次郎は、幼いときから母親思いの優しい子供で、家計を助けるために魚を捕ったり、米つきのお手伝いなどをした⁽⁵⁾。どうも世界の偉人は、貧しい環境によって作られるように思われる。豊かになりたい、母を助けたい、兄弟姉妹を一人前にしたいなどから人生の生き方が積極的になり、勇気が出てくるのかも知れない。逆境は人間を育てるようだ。

(漂流) 1841年に(まだアメリカに行っていないので単に万次郎として置くが)、14歳になった万次郎は、生誕地の中浜から約150キロも離れた宇佐浦に行った⁽⁶⁾。そこで、魚捕りの小さな船のお手伝いとして、大人の筆之丞(ふでのじょう)、重助、五右衛門、寅右衛門と一緒に乗船、1月5日のことであった。船出してから三日目に突然の嵐に遭遇し、漂流が始まり、六日目には太平洋を流され鳥島に漂着したのであった。六日目に鳥島に漂着したというのは、随分黒潮は流れが早いという感じがする。当時、鳥島は無人島であったので食料はなく、生きるためには自活しなければならず、五人の漂流者は生きるための戦いであった。約五カ月の間、鳥島と言うだけあってアホウドリ(当時、藤九郎と呼んでいた)が多く、それを食べていたであろうし、また貝や木の芽等を取って食していたに違いない。困ったのは水で、貝殻に雨を貯めたり、岩からしみ出てくる水を飲んだ。

(救済) 五カ月の無人島暮らし。しかし幸運が巡ってきた。当時米国の捕鯨船が太平洋上で鯨を捕り、その油を機械や燃料にするために集めていた。米国のボストン近郊からやってきた捕鯨船ジョン・ホーランド (John Howland) 号に救済され、その船長は、ホイットフィールド (William H. Whitfield) であった。捕鯨船ジョン・ホーランド号は、乗組員の新鮮な肉、特に亀の肉を求めてやってきたのであった。もちろん何ヵ月にも渡る長い航海であったから船上で豚や牛を飼って食していたが小笠原諸島に至りそれらも欠くようになり新鮮な肉を求めていたのである。「……万次郎は一人で一キロの山道を走って……島の南西の海が見える所に行くと、ハットした。思った通り、さっきの大きな船が停まっていた。……山道をもどり四人に告げ、元の所に急いでもどった。……着物を脱いで振り大声で助けを求めた。……ボートからは、こっちに来いと手まねで合図があった。ボートに乗っているのは見たこともない大男や色の黒い人たち……」⁽⁷⁾と。彼ら四人は救済されたのであった。まさに天国へ行った気分であったであろう。万次郎たちの助けてもらいたいと言う高揚した心情に比して、ホイットフィールド船長の航海日誌には、「1841年6月27日、日曜日 南東の微風あり。午後一時島を目にする。海ガメでもないかと、ボート二艘を調べに出す。漂流者五名を発見し、ただちに本船に収容する。五名、飢えを訴えるも、他は一切理解不能。島の位置、北緯30度31分」⁽⁸⁾と淡々と記されているだけであった。万次郎たちを救済した船は、米国マサチューセッツ州ニューベッドフォードと言う港町を基地としていた捕鯨船であった。その地は、英国から清教徒たちが米国の第一歩を踏んだプリマス (Plymouth) に近い⁽⁹⁾。救済されてから美味しい食事が出されたが、船長は飢餓状態にある五人には大量に与えないようにと忠告した。この忠告は大事で、飢餓状態にある場合、大量に食事をとると消化不良を起こし死亡するというのが通説だからだ。捕鯨船ジョン・ホーランド号は、万次郎等を救済後、約五ヵ月間操業を続け、万次郎の動向を観察。英語を学び、お手伝いもする万次郎の積極的生き方を評価する。その後食料、水、燃料の補給のためにサンドイッチ島 (現在のハワイ) に向かう。

(人生の岐路) サンドイッチ島に上陸し、漂流民がどこから来たのかを登録しなければならなかった。船長はその医師兼宣教師のチャド博士に紹介し、そのチャド博士は、五人の漂流民にどこの国からやってきたかを知るために、「両手を合わせ、深々と頭を下げ、君たちは神仏を拝むとき、このようにするのか」と聞いた。答えは「そうです」であった⁽¹⁰⁾。これは日本から来たことの証明する証拠となるものであった。この様に神仏を拝む態度は、どこの国からきたかの証拠のみならず、文化の質の高さを証明することにもなり、非常に大事な人間の生き方である。

14歳の万次郎は、他の4人筆之丞、重助、五右衛門、寅右衛門の仲間と別れることになる。何故万次郎のみがホイットフィールド船長に連れられて米国本土まで行ったかについては、万次郎が頼んだということも考えられるが、しかし船長と万次郎の関係から考えて、万次郎が頼んだには無理がある。やはり船長が救済してから約5ヶ月間、万次郎の生活を観察して、船長がこの人物を立派な大人にしようと決断したと思われる。船長が万次郎を連れていった方が正しいであろう。それだけ万次郎は将来性のある人物として受け取られたのである。ここは人生の岐路として大事なことだ。自分がどれだけ優れていると思っていなくても、他人がどう評価するかがあるからだ。万次郎はサンドイッチ島を離れてからも捕鯨船での手伝い、英語の飲み込みの早さ等一生懸命に努力したのであった。 Guam島、ソシエテ島等、太平洋の真ん中で鯨捕りを手伝い、南米周りで1843年5月に母港のベッドフォードに戻った。ホイットフィールド船長にとっては3年7ヶ月振りの帰国であった。捕鯨船の航海というのは当時の米国にとって重要な産業であったのだ。

(米国での教育) 日本人最初の米国留学生はジョン・万次郎であった⁽¹¹⁾。しかし漂流のお陰であった。万次郎は、日本の身分階級社会では全く教育を受ける機会がなかった人物。教育は人間を育てるのに重要であるということを万次郎は証明した。このことは身分制度は、人々を支配するのに都合が良い制度であるとの証明にもなる。記録によれば、ストーン・スクールでA、B、Cを習ったというのであるから日本の小学校のようなものであろう。その学校は通称オックスフォード・スクールと言われていた。そこから船長の移転でスコンチカットネット・スクールに転校。そこを卒業し、より高等教育を受けるためにバートレット・アカデミーに進学。高等数学、航海術、測量術、捕鯨等について学ぶ。万次郎の友人トリップ氏は、「万次郎は読書を好むことは驚くばかりで、学業の進歩は著しく、いつもクラスの首席であり、優等の成績で卒業した……態度が温和で、丁寧で慎み深い性質であった」⁽¹²⁾と語っている。今日でも通用する日本人の性格そのものである。さらに桶屋に行って短期間に桶作りを修得したのである。万次郎は桶作りが将来、魚や鯨の肉、油を入れるのに役立つと信じていたのであろう。あるいはホイットフィールド船長の恩に報いようとして、早く捕鯨船に乗るためであったかも知れない。それにしても機敏な万次郎である。万次郎の行動は、人間は慎み深く、しかも積極的に生きることを教えている。

(帰国) 約三年間の勉学後、デービス船長のフランクリン号で約四年間捕鯨に参加、副船長までになる。もう地球は丸いを実感するほどの航海。アフリカ周り、南米周りの捕鯨の仕事で

最新の情報を手にする。帰国の資金稼ぎのためにカリフォルニアのゴールドラッシュに参画し、サンフランシスコからハワイ向けの貨物船に船員として乗船。ハワイで元の漁師仲間と再会するが、重助は死亡、寅右衛門は妻子ありで現地に帰化すると決断。残り筆之丞（伝蔵と改名）、五右衛門と万次郎の三名が帰国。上海行きのサラボイド号に乗船、もちろん船員としてであった。独立国琉球は、薩摩藩の支配下に置かれていたので、直接日本に行くより安全と考えたのであろう。1850年のことで、もう既に米国では日本の鎖国の状況を太平洋上に来ている捕鯨船等から知っていたのである。日本国内では攘夷か開国かで幕藩体制の危機の時代であった。システム理論を出すまでもなく、エントロピーの法則は幕藩体制の閉鎖性が崩壊する事を教えているのだが、しかし体制擁護派は、無知そのものであった。

1851年2月に琉球に到着した三人は、そこで五カ月間取り調べられ、薩摩藩の鹿児島に送られた。約二カ月間島津斉彬の事情聴取を受けたが、実際は薩摩藩が先見の明があつて万次郎の米国経験を聞いて自らの藩に役立てようとしたのが本音であった⁽¹³⁾。その後長崎奉行所に送還。しかし長崎奉行・牧志摩守宛の送り状には、「万次郎が儀、利発にして覇気あり。将来必ずやお国のために役立つ人材であるがゆえ、決して粗末に取り扱わぬよう」⁽¹⁴⁾となっていたのである。長崎奉行所での十ヶ月間の取り調べ、そしてキリスト教徒になっていないかの踏み絵の儀式を終え、無罪となり、1852年6月土佐藩に引き渡された。琉球に着いてから一年半が過ぎていたのだ。今のパスポートを持っている人間はやはり万次郎に感謝すべきである。日本国家の発展に大いに貢献しているからだ。長崎から土佐の高知まで半月をかけての徒歩旅行。ようやく故郷に帰ってきた三人。十一年振りの故郷の空気であった。うれしかったと思う。しかし時代は万次郎等に甘くはなかった。今度は土佐藩による事情聴取で、山内豊信（容堂）等による二ヶ月半の拘束に合う。これも仕方がないと諦める他ない。日本はまだ外国に開かれていなく、無知蒙昧な殿様と幕府からなっていたからだ。それでも島津斉彬や山内豊信（容堂）は、まだましな方であろう。この土佐藩の事情聴取時の記録係が河田小龍であった。彼の記録『漂異紀畧』は、その後坂本龍馬、後藤象二郎、岩崎弥太郎などに影響を与え、明治維新につながっていったのである。事情聴取後、二人の仲間と宇佐浦に一泊し、そこで別れ、1852年11月16日、ついに生まれ故郷、母や兄弟の待つ中浜に着いたのである。万次郎の約12年に渡る世界の旅は、日本のコロンブスであり、また日本改革のための旅であった。ジョン・万次郎は、土佐藩に要請されて侍になり、名前も中浜万次郎になったのである⁽¹⁵⁾。母の胸に抱かれ、幸福の絶頂感、故郷に帰還した安堵感も三日間のみであった。時代は彼を故郷の中浜に留めなかったのである。土佐藩は彼を教授館（こうじゅかん）に招き、米国事情や英語の教育のために使うのであるが、あわただしくなってきた。1852年7月8日にペリー黒船の一回目の来航であった。大槻磐溪ら

が幕府登用を進言、幕府は彼の米国体験を活用して頻繁にやってくる黒船や対米対策を切り開こうとしたのであった。したがって万次郎は、故郷中浜や土佐を去り江戸に参上することになる⁽¹⁶⁾。そして日本の開国、明治維新、教育者として活躍した。

2、日米友好関係を最初に作った民間外交官としてのジョン・万次郎

(万次郎の貢献—閉鎖社会の打破) 冷たい風にさらされた万次郎、温かいぬくぬくとした空気に安住していた幕藩体制。どちらが歴史を動かしたかが見物だ。世界に関する多くの情報を持っていた万次郎は、閉鎖社会ではそれだけで指導者である。また指導者に身分や地位が必要でも無いことを証明した。土佐に帰郷したジョン・万次郎は、中浜万次郎になったのが25歳であった。多感な成長期に異文化に接触したのであるから全く藩や国内に縛られていた人々とは別人になっていた。約12年間の体験は、万次郎が生き字引になっていた証拠であった。すなわち彼は、米国での教育、しかもボストンに近いあのプリマス、米国一の捕鯨基地、実体験の捕鯨活動を通じて太平洋、大西洋を観察、ゴールドラッシュの体験、遠洋航海の技術の修得など頭の中に世界の情報が詰まっていた。それに反して当時の日本の各藩は、時代遅れの幕府と思いつつも、次の第一歩を踏み出せなかった。それは外的世界、外国に関する情報不足、知識不足であったためにどのような行動をとるべきかの判断ができなかったのである。その証拠に万次郎が土佐に帰って来てからの万次郎の海外事情に関する本が25冊にも達しているのである⁽¹⁷⁾。これは、いかに当時の各藩や多くの人々が新しい時代を考えていたかの証拠である。閉鎖社会は人々を不幸にする証である。人間社会は、内的社会と外的社会の間で常に新しい自由な知識と情報、さらにはエネルギーが流入する開放社会であり、このことから閉鎖社会になってはならないというのが鉄則だ。閉鎖社会は支配者に都合の良い社会であり、エントロピーの法則を忘れてはならないことを意味する⁽¹⁸⁾。

(民間外交官としての万次郎) 閉鎖社会の日本の幕藩体制は、万次郎の世界的意味や位置を理解できなかった。特に徳川体制支持の水戸藩は万次郎を敵視していた。いよいよペリー提督の黒船は幕府に対して開国を迫ったのが1853年であった。その時はただ親書を渡して去っただけであったが、幕府は慌てたに違いない。幕府はただ体制護持を考えていただけだ。一方米国側はそうではない。日本に開国を迫っていたのである。したがって万次郎を見る目が違っていたのである。第30代クーリッジ大統領は、「ジョン・マンの帰国は、アメリカが最初の大使を日本に送ったことに等しい。何故ならば、ジョン・マンがわが国の本当の姿を当時の日本

首脳に理解させていたからこそ、われわれの使節ペリーはあのような友好的な扱いを受けることができたのである」と述べている⁽¹⁹⁾。さらには万次郎たちがハワイでお世話になったサムエル・デーモン牧師は、万次郎が再び訪問し、彼がホイットフィールド船長宛に手紙を託した添え書きに「ジョンはいまや、真に日本の重要な人物になりました。彼の地位について彼が話してくれた全部を紙上に載せることはできませんでしたが、ジョン・マンは日本開国に当たって最も重要な役目を演じたものと確信します。彼が日本政府へ提出した報告はすこぶる価値があるものでした。ボーディッチの航海書の翻訳など最も著しいものです」⁽²⁰⁾と記し、万次郎の功績を称えている。また米国第32代フランクリン・D・ルーズベルト大統領から万次郎の長男東一郎に「私はフェアヘブンのワレン・デノラの孫です。彼はお父上をフェアヘブンにお連れしたホイットフィールド船長の船の所有者の一人であります。私の記憶によると、あなたのお父上は私の祖父の家のすぐ筋向かいのトリップさんの家に住んでおられたということです。フェアヘブンの学校に通い、時々デラノ家の者と一緒に教会に行った小さな日本の少年についていろいろのことを、私の少年の頃祖父が私に話してくれたのをよく覚えています。……中濱という名前は、私の家族の記憶にいつまでも残ることでしょう……」⁽²¹⁾という書簡を出している。個々での父上や少年は、万次郎のことである。この書簡の年代は、1933年であったということは日米関係や日米外交にとって重要である。第二次世界大戦の前だからである。また先述のサムエル・デーモン牧師が明治維新以後の1884年に万次郎に会うために日本を訪問し、「いまや彼は六十歳。子息の扶養を受け、自身の財産というものを持っていない。日本政府は、この年老いた、そのむかし日本国のために尽くした忠実な臣民に対し、豊かな恩給を与えることによって政府自身の誉れを高めるよう心から希望してやまない……」⁽²²⁾とまで言わせているのである。明治以降の日本政府が、あの偉大な万次郎をどう扱ったの証左である。以上のことからでも米国側からの万次郎の捉え方と日本側の捉え方でははっきり違うのが明らかである。しかしながら万次郎が日本と米国の橋渡しをした最初の人物であり、専門外交官でなかったとしても両国民の理解を高めた最初の外交官の役割を果たした人物であったと言える。彼以外に当時日米間に外交官がいなかったからである。

(米国から一方的恩義を受けている日本) 日米関係や日米外交の歴史は、米国からの一方的恩恵にのみ依存している日本である。それは咸臨丸の時代から日清戦争、日露戦争など勇ましい時代もあったが、しかし今日まで続いている傾向である。逐次明らかにして見よう。それにしても日米関係と日米外交は、万次郎によって最初の第一歩を踏み出したのは歴史的事実である。それも約180年の歴史でしかない。万次郎が日本に帰国してから後、1853年にペリー提

督の黒船，すなわち蒸気軍艦2艘，帆かけ軍艦2艘の来訪と幕府への米国フィルモア大統領からの親書の伝達を目的に強引に浦賀沖に停泊，親書を渡して退去する。いよいよ幕府も米国の黒船の威力を目の当たりにして，それまで禁止していた造船禁止令を解除した。この禁止令で日本全体や各藩の船力が発展しなかったのである。国内では江戸に向けての売買貨物の増大に伴い大型船が必要になっていたのである。この点から見ても万次郎等が漂流してしまった責任は幕府側にあると言っても過言ではない。何故なら大型船を作らせなかったからである。ペリー総督等は，浦賀に来た次の年の1854年の親書に対する返答を得るために，前回よりも多い9艘からなる大艦隊で再来航した。その年，遂に幕府は神奈川条約，すなわち日米和親条約を締結せざるを得ない所まで追い込まれ⁽²³⁾，鎖国政策の終結となったのである。しかもこの条約の締結後に，萩の松下村塾の吉田松陰の密航を阻止しようとして，この大事な日本の人物を逮捕し，打ち首にしてしまった幕府であったのだ。

神奈川条約の締結後，まだ貿易に関する条約が締結されていなかったので1858年6月19日に幕府はしぶしぶ井伊大老（その後，彼は攘夷論者の水戸藩浪士に暗殺された）を使って日米修好通商条約の締結をしたのであった⁽²⁴⁾。条約内容は米国に有利になっていたことは事実である。しかし問題はその条約の批准の交換をワシントンで行うことになっていたことだ。これは日本側にとっては万次郎が語っていた米国事情を証明する裏書きの役割を果たしたことだ。日本側，すなわち幕府は米国に行くにも大型船は持っていないので手も足も出ない状況に追い込まれる。この条約締結の2年後の1860年になって初めて準備が整っての渡米であった。いよいよ咸臨丸の登場である。

（米国の一方的支援を受けた咸臨丸の顛末）日本側の幕府は，閉鎖社会を作り，しかも鎖国政策を推進していたために日本からの条約批准のための使節団を自力で派遣することができなかったのである。すべて米国からの支援によっていた。まず咸臨丸は中古船としてオランダから購入していたものだ。次に米国までそれまで航海した者がいなかった。咸臨丸の司令官は木村撰津守，指揮官あるいは艦長は勝海舟であったが，彼らは遠洋航海の経験が全くなかったと同時に，乗船時に船酔いで寝ていたと言われている。総勢96人の乗組員，そして江戸湾で難破したクーパー号の11人（ブルック船長は咸臨丸が帰国するまで支援し，サンフランシスコで別れた）を合わせて101人が乗船した。通訳として乗船した万次郎が捕鯨船での遠洋航海の経験から咸臨丸は，「万次郎を事実上の船長とし，……万次郎学校だった」⁽²⁵⁾と言われている。同船に同乗したブルック船長は，彼の日記の中で「これからの日本海軍の改革に必要な事柄について見通しのある考えを持っているのは，乗組員の中で万次郎ひとりだけである」⁽²⁶⁾と記して

いた。

ところで日本からの日米修好通商条約批准のための使節団は、どこに行ったのであったか。彼らはこの咸臨丸に乗船していなかったのである。咸臨丸は日本では初めての遠洋航海訓練船であったのだ。したがってその批准のための使節団は、これまた米国が用意した軍艦ポーハタン号に乗船、咸臨丸より3日遅れの1月22日に横浜からサンフランシスコに向けて出航したのであった。このような顛末から日本は米国の支援をどこまでも受けていたと断言できる。それどころか使節団の運賃は無料でワシントンまで届け、帰国は今度はナイアガラ号に乗船、アフリカ経由の全世界旅行で江戸まで届けたのである。サンフランシスコでのホテル代も無料であった。さらに咸臨丸は中古船であったためにサンフランシスコに着いてみると泥船に近く、修繕する必要になった。サクラメントに近いメアアイランド造船所で修理、その修理代も木村撰津守が支払いを申し出たが受け取り拒否で無料。木村撰津守は困り果て、二万五千両を軍人の未亡人団体に寄付することでようやく日本側の願いが叶えられたというのであるから米国の懐の深さを示した出来事であった。また帰国に際して咸臨丸の航海に不安があったために、ブルック船長のクーパー号の乗組員から五人を選び、雇い入れ、ハワイ経由で帰国してきたと記されている⁽²⁷⁾。ハワイではもちろん万次郎がホイットフィールド船長やその関係者、特にサムエル・デーモン牧師と再会し、万次郎自身の帰国後の報告、そして翻訳した航海学書の寄贈など日本を代表した外交官の役割を担った。というのもその帰国時に日本を代表していた木村撰津守や勝海舟などは米国やハワイに知人・友人もいなく、地位だけは代表していても実質的に何の役割も果たしていなかったからである。この点からも万次郎は外交官であったのだ。

3、日米関係の永遠なる外交官としてのジョン・万次郎とその家族たち

(外交官としてのジョン・万次郎) 宇宙の変化や流れと同様に、人々の移動や往来と言う流れも、有史以前も以後もごく自然の事態である。その流れの中から集落、社会、国家が形成されてきたのもごく自然の事態である。その流れは、変化、旅行、交流、外交と言う言葉に置き換えることができる。1970年頃のが外交は、外国交際と呼び、外国交際を担当する人を交際官、弁務使、公使と明治政府は定義し、決して外交官と言わなかったと記されている⁽²⁸⁾。その当時の交際官の鮫島尚信は、25歳で弁務使という肩書きで、英国、独国、仏国の三国を兼務した外交官であったが、英国に外交官として承認されなく、否応なく仏国で外交の仕事をし始めたに過ぎない。その苦勞は並大抵ではなく、心勞が重なって35歳でパリで客死した⁽²⁹⁾。彼の仕事は、外交交渉どころか、また情報収集どころか、これが新生日本国家、明治政府の初仕事としては

あまりにもなさない。やはり江戸幕府の徳川体制の閉鎖性が犠牲者である。この鮫島尚信に比べて、ジョン・万次郎は、先述したので繰り返さないが外交官そのものであったと言える。この点で初めての福林正之の指摘、すなわち「……万次郎は十六歳の少年とはいえ、立派に外交官の役を果たしたといえましょう。いわば、初代の駐米日本大使といったところです」⁽³⁰⁾を読んでほっとした。万次郎が果たした役割についてあまりにも歴史的高い評価がなされていないので、問題を感じていたからである。さらに童門冬二と松永義弘の対談解説を読んで、万次郎の身分階級が低かったから万次郎は評価されていないと言うのも、万次郎の外交的手腕を正當に評価していないと言える⁽³¹⁾。

(永遠なる外交官としてのジョン・万次郎とその家族たち)

外交官の役割は、情報収集と正確な知識の集積であり、友好関係の維持・継続である。当時のジョン・万次郎は、先述した明治政府の外交官以上の手腕を発揮した。さらにジョン・万次郎の家族や子孫は、日米関係の第一歩を築いたジョン・万次郎の功績を180年も維持・継承し、日米友好関係に尽くしているからである。

ジョン・万次郎の外交官としての役割を考察してみよう。第一に、米国の当時の現状についての情報を収集したことである。この情報収集は外交官の主要な仕事であることには今も変わらない。米国の民主主義、人種差別（万次郎自体が教会で差別を受けた）、奴隷制度を理解していた。ジョン・万次郎が滞在していた頃、ボストンの北側、コンコードにいたヘンリー・D・ソローは、人種差別、奴隷制度、メキシコ戦争を批判していたと同世代人であったのがジョン・万次郎であった。ジョン・万次郎が住んでいたニューベッドフィールドやフェアヘブンにつながっているコッド半島にもソローは行っているのである。ジョン・万次郎は、米国の中で最も米国らしい土地に住んでいたのである。従って最新の情報を手に入れることができた。第二に、米国の当時の重要産業の捕鯨基地にいたことである。そこで捕鯨に関する多くの情報、知識を会得し、実際に捕鯨船に乗り、操業にも参加し、副船長までなっているのである。これらは外交官にとっての役割としての知識と実体験となり、指導できるまでの専門家である。第三に、捕鯨の航海を通じて地球を回って来たことは、全く地図上の知識ではない。航海中に寄港した土地の情報を手に入れている。この知識は、帰国後の日本の各藩にとっても、また幕府にとっても新鮮な情報となって日本の開国の導因になった。これは外交官としての既存の政策転換に役立ったことになる。第四に、今日でも日本の外交官が現地の職員を使って新聞等のスクラップ作りに精を出している姿が自嘲気味に伝えられているが、ジョン・万次郎は実際、現地の新聞を読み、また本を読んで情報収集をしている。彼が帰国する際に、ジョージ・ワシント

ンの伝記を持ってきたこと等は特記すべき才能であった証明である。第五に、世界地図を持ち帰ったり、世界で最も優れていたナサアニエル・ボーディッチ (Nathaniel Bowditch) の『航海学書』を持ち帰り、それを読みこなす能力はもちろん、翻訳書まで作った能力は現在の制度化された外務省の外交官以上の役割を果たしている。第六に、初等教育を米国で受けたことは現在の帰国子女と同等であり、また航海術を取得するために専門学校で教育を受けたことは現在の海洋大学を出たに等しい。日本外務省は現在、国民の税金を使って海外の大学に学ばせる研修を行っていることとジョン・万次郎が米国で受けた教育は同等である。第七に、米国建国二百年祭の記念行事 (1976年) で、米国政府は、ワシントンのスミソニアン博物館で「海外からの訪問者展」でジョン・万次郎を取り上げたのである。普通の専門外交官ではないジョン・万次郎を取り上げた米国の懐の深さを象徴している出来事である。これはジョン・万次郎を日米友好関係を作った最初の外交官としての位置を世界に発信したことである。当時私は国際会議でフラデルフィアやニューヨークに滞在していたので実感できる出来事である。第八に、1987年に日本の皇太子御夫妻 (現在の天皇御夫妻) がフェアヘブンに立ち寄り「日米友好発祥の地」の式典に祝辞を述べたことは、ジョン・万次郎が日米外交の平和の礎を最初に作った人であり、また外交官の役割を果たしたことへの感謝の現れである⁽³²⁾。

現在、ジョン・万次郎の子孫や家族たちがホイットフィールド船長の子孫や家族と交流が続いていることが記されている。ジョン・万次郎の子孫で日米交流に尽くしてきた人は、中浜東一郎、中浜西次郎、中浜慶三郎、中浜明、中浜博、中浜武彦等がおり、現在五代目に至って友好関係を継続している。これは日米関係で驚異的な出来事である。また土佐清水市とフェアヘブン、ニューベッドフィールドと友好姉妹都市になり、ジョン万ハウス (土佐清水市)、ミリセント図書館 (フェアヘブン) などがジョン・万次郎やホイットフィールド船長の子孫や家族の偉業を伝える場所になっている⁽³³⁾。足摺岬に建っている中浜万次郎の銅像は日米友好の発展を願っている象徴である。

4、ジョン・万次郎問題のシステム論的再解釈

(万次郎問題のシステム論的視座) 振り返ってみれば、ジョン・万次郎こと、中浜万次郎は、あまりにも幼く、国家間の外交的駆け引きなどは全く知らなかった。1840年代に日本近海に出没していた英国、米国、オランダ、フランス、ロシアの艦隊が何を目的にしていたかも知らなかった。彼は、またポルトガル人が鉄砲を16世紀半ばに種子島に伝えたことや長崎の出島という特区がオランダにのみ許されていたこと。さらにはオランダとの関係も豊後海岸に漂着した

オランダ船によって始められたことは知っていただろうか。客観情勢は日本の周りに新たな出来事の発生であった。それを雑音と理解するか、あるいは新たな価値を含む新規な情報と理解するかの違いである。システム論的に言えば、新たな雑音が新規な価値を含むものとして捉え、それを自らのシステムに取り込んで構造改革し、新たな秩序を形成するとなるのであるが、このような理論的裏付けのない江戸期においては無視するか、閉鎖するしか方策がなかったであろう。新たな価値を含む雑音は、無視や閉鎖に合うとますます増強していくのが常である。システム論では閉鎖系としての社会は、情報や知識に制限を加え支配を有利に展開するということになる。また孤立系としての社会は、エネルギーや食料のみならず、情報や知識にも制限を加え支配を有利に展開するということになる。いずれの場合でも一時的、短期的に秩序が形成されたかに見えるが、長期的にはますますエントロピーが増大して行き、その結果から社会が硬直化し、無秩序を促進し、最終的には崩壊するとなる⁽³⁴⁾のである。このような理論的視座を江戸幕府は理解ができなかったのである。

(ジョン・万次郎は開放系) ジョン・万次郎は、開放系であった。彼は開放系の特徴としてエネルギーや食料のみならず、情報や知識もまた自由に取り入れる素地があった。これは今も昔も人間存在の基本原理である⁽³⁵⁾。ジョン・万次郎の時代は、江戸期も後半で異国船打ち払い令が出ているくらいであったから閉鎖系としての社会が完成していたと見て良い。彼は人づてのうわさ話としての情報は耳にしていたとしても、日本が置かれていた客観情勢に関する正確な情報や知識を正確に理解できる立場にもなかつたし、またほとんど知らなかったのでは無いかと思われる。彼は専ら家族を助け、母親の気持ちを汲んで漁師の手伝いをしていたに過ぎない。彼及び彼の家族の身体が必要とするエネルギーあるいは食料確保に邁進する毎日で、もう一方の心は新たな価値を含む新規な情報と知識を求めていたに違いない。その好機が漂流によってもたらされ、米国での教育と捕鯨の体験によって、さらには異文化接触によって一気にもたらされた。そのため米国での体験にあらゆる面で積極的になれたし、その結果短期にエネルギーや食料のみならず、情報や知識を豊富に取り入れ、身体と精神の均整がとれたに違いない。また若かったことも利点であった。このことは、他の四人の漁師とは際だった違いを見せている。ホイットフィールド船長がジョン・万次郎にもっと米国で勉強させたいと思わせたのもこの点にあるかも知れない。魅力的少年の万次郎であったのだ。開放系としての万次郎であったことが価値ある個性的万次郎となり、土佐のみならず、どこでも出番が回ってきたのである。彼が帰ってきた時には、特に日本においては米国事情を知っているという高い情報的価値を持っていた。というのも世界の中で置かれている日本の立場は、帝国主義主動の先進国の列

強とどう対処するかにかかっていたからである。この点で万次郎の米国体験は、日本の新たな体制づくりに必要な価値の搬送者となり、明治維新という体制変革に結びついていた。

最後に人間・万次郎の16歳頃の少年の恋心の詩と故郷中浜に帰国間近の心の詩を掲載して置く。

中浜万次郎の詩

(万次郎16歳頃)

Tis in the chilly night	とても寒い夜のこと
A basket you've got hung.	あなたのバスケットをつるいしたヨ
Get Up, Strike a light!	目をさまして、明かりをつけて！
See me run.	逃げて行く僕を見つけておくれ
But no take chase me.	でも、追い掛けたりはしないでネ (中浜博訳)

(万次郎25歳頃, 間崎所蔵, 1853年2月13日付)

Heaven and Ground	天と地
Day and Month Land	日と月, 陸
River Sea and Wind	川, 海そして風 (南部洋一・坂牧正隆訳)

おわりに

本論文では日米関係の始まりがジョン・万次郎によって開かれ、そして彼は日米関係の最初の民間外交官であったという新たな論点を加えた。彼は専門外交官としての情報収集、整理、そして分析を全体としてされて、江戸幕府、薩摩藩、土佐藩に伝え、各藩や幕府に日本の開国の方向を示唆したことは専門外交官が果たす役割を十分果たしていると言う結論から言えることである。また彼の米国や捕鯨船での世界航海の経験が日本の開国に向かう導因になり、結果的に明治維新に結合していったからである。さらには米国の民主主義のあり方、企業のあり方、米国の捕鯨産業について日本に紹介したことはやはり外交官の役割を十分に果たしたのである。現在、ホイットフィールド船長の子孫や家族と中浜万次郎の子孫と家族が日米友好のために相互交流していることは、日本人としては忘れてはならないことであり、今後の日米関係のあり

方を示唆している。最後に日米関係で、咸臨丸の米国への航海、日米修好通商条約締結のための使節団等の経費については米国からの支援であったことが分かっており、明治維新から第二次世界大戦までの歴史は特別の期間であったが、しかし敗戦後の日本の国家が国際連合体制の中でやはり米国の防衛体制の中で生存していることは、やはり米国の支援の中に在ると結論出来る。

註と引用文献

- (1) 成田和雄『ジョン万次郎の一生』中日新聞本社，1978年，19頁。
- (2) ジョン・万次郎がペリー提督が来た時に、通訳として起用されなかった理由に、どなたも触れていないが、ペリーの出身地がニューポートであったからかも知れない。そこはジョン・万次郎が住んでいた場所から州こそ違いが非常に近いことを幕府側が知っていて、もし通訳をした場合にペリーから故郷話をされて意気投合してしまうと心配したと推察される。この説は幕府が通訳に使わなかった理由として符合する。参照、中浜博『私のジョン万次郎』小学館，1991年，107頁。
- (3) 中濱博『中濱万次郎』富山房インターナショナル，1005年，187-188頁。
- (4) 中浜明『中浜万次郎の生涯』富山房，1970年，172頁。この中浜明の著書では掲載されていないが、万二郎と言う名もある。参照 山下恒夫再編「中浜万次郎帰朝後履歴書」『江戸漂流記総集』第五巻（石井研堂これくしょん），日本評論社，1992年，207頁。
- (5) 中浜博『私のジョン万次郎』小学館，1991年，4頁。
- (6) 万次郎が中浜から宇佐浦に行き、小さな漁船に乗るまでの経緯について両説がある。「宇佐浦の漁師が頼みに来た」の説は、福林正之『秘められた歴史の人』さ・え・ら書房，昭和48年，8-11頁に、また「母親から頼んだ」の説は、中浜博『中濱万次郎』小学館，1991年，5-6頁に記述されている。当時150キロも離れたところから頼みに来たというのは不自然な気がする。
- (7) 中濱博『中濱万次郎』富山房インターナショナル，2005年，19-21頁。
- (8) 中濱武彦『ファースト・ジャパニーズ ジョン万次郎』講談社，2007年，28頁。
- (9) ニューベッドフォードは、地理的にプリマスに近いのはいうまでもないが、船長ホイットフィールドは、-1620年メイフラワー（The Mayflower）号で英国から来た子孫であると記されている。参照、中浜明『中浜万次郎の生涯』富山房，1970年，42頁。
- (10) エミリー・V・ウオリナー『ジョン万次郎漂流記』宮永孝訳，雄松堂出版，1991年，22頁。
- (11) 中浜博『私のジョン万次郎』小学館，1991年，46頁。
- (12) 中浜博『私のジョン万次郎』小学館，1991年，66頁。
- (13) 島津斉彬が万次郎の知識や経験、さらに捕鯨船の設計に興味を示し、罪人扱いをしていない記述が以下の著書に記されている。参照、中濱武彦『ファースト・ジャパニーズ ジョン万次郎』講談社，2007年，114-116頁。また島津斉彬が万次郎から米国の事情を歓待しながら聴き、さらにエンジン付きの米国の捕鯨船の模型、本物の捕鯨船を建造させたとの指摘もある。万次郎は捕鯨船の設計も出来る技術者になっていたのだ。参照、エミリー・V・ウオリナー『ジョン万次郎漂流記』宮永孝訳，雄松堂出版，1991年，104-105頁。
- (14) 中濱武彦『ファースト・ジャパニーズ ジョン万次郎』講談社，2007年，116頁。ただし島津斉彬から長崎奉行（内藤安房守忠明）への書簡には「万次郎が儀、利発にして覇気あり。将来必ずやお国のために役立つ人材であるがゆえ、決して粗末に取り扱わぬよう」と記されていない。参照、山下恒夫再編「島津斉彬書簡四通」『江戸漂流記総集』第五巻（石井研堂これくしょん），日本評論社，1992年，107-108頁。中浜博は、「長崎奉行牧志摩守が万次郎はあ頗る伶俐にして国家の用となるべきものなり」と記している。参照、中浜

- 博『私のジョン万次郎』小学館，1991年，101頁。
- (15) ジョン・万次郎，あるいは万次郎から中浜万次郎に名前が変わったのは，嘉永6年11月5日（西暦1853年12月5日）の江戸幕府の辞令からである。幕府側の江川太郎左衛門から万次郎の推薦文が幕府に出された文書（嘉永6年10月21日）の中にも中濱万次郎と使われている。参照，中濱博『中濱万次郎』富山房インターナショナル，2005年，134-135頁。ただしこれらの日付よりも先の嘉永4年9月11日に島津斉彬の「島津斉彬書簡四通」の中で「中の浜万次郎」と使われている。参照，山下恒夫再編「島津斉彬書簡四通」『江戸漂流記総集』第五巻（石井研堂これくしょん），日本評論社，1992年，106頁。
- (16) 小沢一郎「ジョン万次郎に学ぶこと」『ジョン万次郎とその時代』（川澄哲夫編），廣濟堂，2001年，164頁。
- (17) 中浜明『中浜万次郎の生涯』富山房，1970年，169-171頁。
- (18) 閉鎖社会よりも開放社会の有効性の根本的原理については，拙著『システム哲学序説』勁草書房，1988年で詳細に論じられている。
- (19) 小沢一郎「ジョン万次郎に学ぶこと」『ジョン万次郎とその時代』（川澄哲夫編），廣濟堂，2001年，165頁。
- (20) 中浜明『中浜万次郎の生涯』富山房，1970年，245頁。
- (21) 中浜博『私のジョン万次郎』小学館，1991年，64頁。
- (22) 中浜明『中浜万次郎の生涯』富山房，1970年，287頁。
- (23) 日米和親条約は12条からなっていたが，その骨子は，下田と箱館の開港，米国船に薪，水，食料の供給，米国漂流船員の保護，米国領事の設置であった。
- (24) 米国総領事ハリスによって通商に関する条約の必要性を幕府は迫られ締結する結果になった。その条約の骨子は，14条と貿易協定七則からなっていた。その中で協定関税率は日本側に不利，神奈川，兵庫，長崎，新潟の開港，しかも開港地の40キロ四方を米国人の自由特権地域とし，領事裁判権が米国にあるとした特権が盛り込まれていた。
- (25) 小沢一郎「ジョン万次郎に学ぶこと」『ジョン万次郎とその時代』（川澄哲夫編），廣濟堂，2001年，165-166頁。
- (26) 中浜明『中浜万次郎の生涯』富山房，1970年，228頁。
- (27) 中浜明『中浜万次郎の生涯』富山房，1970年，226-254頁。中浜明の指摘から予見できることは，咸臨丸と条約批准のための使節団があまりにも米国のお世話になったことから幕府としては自尊心を傷つけられてしまうこと，また攘夷派対策のために詳しい情報を各藩や幕府の要人に伝えなかったことが分かる。福沢諭吉すらもが万次郎の外交官としての役割のすごさについて言及していないことから万次郎ショックが強かったと想像できる。帰国後の福沢諭吉の教育や啓蒙書から見ても明確だ。
- (28) 犬塚孝明『ニッポン青春外交官』日本放送出版協会，2006年，4頁。
- (29) 犬塚孝明『ニッポン青春外交官』日本放送出版協会，2006年，3，64-68頁。
- (30) 福林正之『秘められた歴史の人』さ・え・ら書房，1973年，81頁。
- (31) 童門冬二と松永義弘の対談解説で，童門「……単なる漁民万次郎でしかないんだから，中浜だって後に与えられた姓ですよ」（310頁），松永「……万次郎はアメリカ，アメリカと言い過ぎますな。……」（311頁）と語っているが，この二人は万次郎の時代背景を知らないのか，あるいは万次郎と比較して自分たちは優位の身分階級に属している自己満足か，さらにまたアメリカ経験のない二人の嫉妬心かのいずれかである。いずれにしても万次郎の歴史的，外交的手腕や情報収集の能力を過小評価している。参照，童門冬二『ジョン万次郎』学陽書房，1997年。
- (32) ジョン・万次郎が外交官の役割を果たしていたことについて，八項目にまとめてあるが，彼の子孫たちの著作を読んでまとめたものである。多くの人々が万次郎を話題にした著作があるが，読み物として良いが研究資料としては耐えられなく，彼の子孫たちの著作の方が研究資料として有効である。
- (33) 中浜博『私のジョン万次郎』小学館，1991年，261-277頁。
中濱武彦『ファースト・ジャパニーズ ジョン万次郎』講談社，2007年，169-191頁。

伊藤重行

- (34) 参照, 伊藤重行『日本からの新しい文明の波』勁草書房, 1993年。
(35) 参照, 伊藤重行『システム哲学序説』勁草書房, 1988年。

参考文献

- アーサー・モニーズ, ウェルカムジョン万の会『ジョン万次郎物語』富山房インターナショナル, 2006年。
伊藤重行『日本からの新しい文明の波』勁草書房, 1993年。
伊藤重行『システム哲学序説』勁草書房, 1988年。
伊藤重行『アジアと日本の未来秩序』東信堂, 2004年。
犬塚孝明『ニッポン青春外交官』日本放送出版協会, 2006年。
井伏鱒二『ジョン万次郎漂流記』『井伏鱒二集』(日本文学全集), 集英社, 1973年。
エミリー・V・ウォリナー『ジョン万次郎漂流記』宮永孝訳, 雄松堂出版, 1991年。
川澄哲夫編『ジョン万次郎とその時代』廣済堂, 2001年。
Tai Kawabata, "One of A Kind," *TIMEOUT*, The Japan Times, Monday, March 22, 2004.
中浜明『中浜万次郎の生涯』富山房, 1970年。
中浜明編『中浜東一郎日記』第1巻, 富山房, 1992年。
中濱武彦『ファースト・ジャパニーズ ジョン万次郎』講談社, 2007年。
中浜博『私のジョン万次郎』小学館, 1991年。
中濱博『中濱万次郎』富山房インターナショナル, 2005年。
成田和雄『ジョン万次郎の一生』中日新聞本社, 1976年。
南部洋一『ジョン万次郎とふたつの詩』『翼の王国』6月号, 全日空(株), 2004年。
福林正之『秘められた歴史の人』さ・え・ら書房, 1973年。
山下恒夫再編『江戸漂流記総集』第5巻(石井研堂これくしょん), 日本評論社, 1992年。